



怡土人権だより

令和2年度
第3号
3月15日発行

発行：糸島市人権・同和教育推進協議会 怡土支部

略称【市同協怡土支部】
☎322-7815

「いのちスケッチ」
—今回もこころ温まる映画でした—

毎年12月

4日～10日の

人権週間に伴う

行事の一つで

ある人権映画祭

を、12月6日に

怡土コミュニティ

センターで開催し

ました。

今年、国内で初めて動物

の無麻酔採血に成功するな

ど、動物福祉に特化した動物

園として世界からも注目さ

れている福岡県大牟田市動

物園を舞台にした人間ドラ

マ「いのちスケッチ」です。

あらすじは・・・

東京に上京し

て漫画家を目指

して奮闘してい

た青年、田中亮

太（佐藤寛太）

は、自身の夢に

限界を感じて故

郷の福岡に帰っ

てきます。

実家に頼れずに旧友の部

屋に居候する亮太が紹介さ



れたのは、地元の延命動物園

でのアルバイトでした。

園長の野田（武田鉄矢）や、

獣医師の石井彩（藤本泉）ら

と働いていくうちに、ここが

動物の健康と幸せを第一に

考える「動物福祉」に力を入

れる、世界でも

珍しい動物園で

ある事を知り

理解していくの

でした。

一方、現実

は予算縮小で運営が

危機的状況にあることから、

動物園の取り組みを自らの

絵で伝えるために、もう一度

筆をとることを決意します。

私たちに大きな勇気と希

望を与えてくれた作品でし

た。

新型コロナウイルス

ウィルスの

感染拡大が

深刻化する

中、コロナ対策

としてマスクの



シトラスリボン写真館

シトラスリボンプロジェクトとは？

感染者や医療従事者をはじめ、すべての人に「ただいま」、
「おかえり」のいたわりの気持ちを広める活動です。
リボンの3つの輪は、家庭、地域、学校または職場を
表しています。

シトラスリボンプロジェクトは愛媛県の有志が始めたもので、
糸島市もその思いに賛同し活動の輪を広げていきます。

新型コロナウイルス感染で起こった新たな差別

感染した人や医療関係
の人などに対して、ばい菌とか汚い
言葉を投げかけたり、誹謗中傷を
ネットに上げたり、張り紙をしたりなど
にかく人を傷つける重大な人権侵害が
日本各地で起きています。
解決出来るのは、
「やさしさ」と「思いやり」
です。



いとゴンも
頑張っとうばい！

検温・排気ダクトの設置など
の対策をして、完全予約制で
開催しました。
予約制とした事で、どれだ
け参加があるか心配してい
ましたが、お断りをお願いす
る程の申し込みがあり、49名
の方々に鑑賞して頂けまし
た。
【三雲行政区 推進委員】



人権センターの2階エントランスに
シトラスリボンプロジェクトの紹介
パネルが掲示されています



今年のフィールドワークは

佐世保方面へ戦争の遺構巡り



魚雷発射試験場跡にて

今回のフィールドワークは、コロナ感染予防のため、いろいろな行事が中止される中ではありましたが、密を極力避けるために参加者を30名程度に限定し11月24日に行いました。

今回の視察先は、旧帝国海軍の工場があった佐世保周辺にある戦争遺構に触れ、当時の人権のありようを知り、今後の生き方や地域のありようを展望することを目的として、「針尾無線塔」「浦頭引揚記念館」「無窮洞」「特攻殉国の碑」「魚雷発射試験場跡」を訪れました。

比較的近いところではありませんが、このような機会がないと思えばあまり行くことがないと思いますので、簡単に各所を紹介します。

一年間の活動を終えて

今年度は、最後まで新型コロナに影響された1年間でした。

皆様におかれましてもこれまでとは違う日常を過ごされたなかで、支部活動にご協力いただき、厚くお礼申し上げます。

国の内外において、新型コロナに関する差別事象が発生している中で、市同協怡土支部として活動できない現状に忸怩たる思いを抱きつつも、感染症を予防するため事業を縮小しながらの対応となりました。

来年度も同様の状況が推察されますが、出来る限り支部活動を進めてまいりますので、本年同様ご協力をお願い申し上げます。



【針尾無線塔】
西海橋から見える3本のコンクリート製の無線塔です。

太平洋戦争開戦の暗号を送信した電波塔とされています。

太平洋戦争開戦の暗号を送信した電波塔とされています。ますが、実際は呉の通信隊が送信したものを受信して再送信したものだそうです。

(詳細不明)

大正7年5月11年にかけて建設され高さが136mもあります。現在も劣化は見られずあと100年以上は持つだろうとの事です。

【浦頭引揚記念館】
太平洋戦争の終結により、海外から多くの人々が食うや食わずで生死の境を漂い



ながら引揚げて来た港のひとつです。

私の父もシベリア抑留後に帰国していますが、当時の苦しみは聞いておりません。

極限の苦しみを味わった人はなかなか話そうとしません。

資料館の展示物から推し量るしかないと思います。

【無窮洞】
終戦前、教師と生徒が手作業で掘った防空壕跡です。子ども達の命と学問の機会を守った教師の使命感に感動しました。

【特攻殉国の碑】
特攻といえば、神風特別攻撃隊による特攻が脳裏に浮



田端義夫さんのかえり船の歌碑

びますが、ベニヤ張りの船を用いた震洋特別攻撃隊の資料が展示され、特攻に出陣した兵士の名が刻まれた碑が建立されていました。

【魚雷発射試験場跡】
大村湾の川棚町にある魚雷発射試験場で、軍の工場で製造された魚雷の試験をしていました。

戦後75年以上経過しているため建物は朽ち果てつつあり、保全すべきか自然に任せ消滅させるか考える時期に来ているようです。

今回のフィールドワークで見た戦争遺構はいずれ朽ち果てなくなっていくでしょう。

また、戦争を体験していない私たちには、当時の人の痛みや思いを知ることが出来ません。

しかし、私たちは幸いにして、それぞれの意見を言える時代に生きています。何が問題なのか、何を目標にしているのかを明確にして、間違った方向に行かないように熟慮することが必要だと感じました。【井原行政区 推進委員】

